

俺は俺らしく生きたいだけだ_____

山瀬 浩樹（やませ ひろき）

人生において、面倒くさいと思うことはたくさんある。
人からの干渉も、周りからの羨望の目も、当たり前を押し付けられることも

でも本当は、その当たり前の中に生きられない自分の性が一番面倒くさい

「ひろきくんって王子様みたい。」

もっとも遠い記憶の中、当時のクラスメイトの女子がそう言っていた。
その相手がいったいどんな顔をしていたのかも、人柄だったのかも全く覚えていないけど、その声だけは脳裏に焼き付いている。

当時はこの言葉がきっかけになって、俺に対する周りの反応が変わった。

・抜け駆け禁止

そんなくだらないルールの項目は日に日に増えていった。

ひろきくに触ったらいけない

ひろきくに勝手に話しかけちゃいけない

ひろきくの隣の席になったらいじめの対象になる

俺の気持ちなんて関係なく、女子の中で変わっていく俺の扱いに気持ちの悪さを覚えていた。

男子ですらそんな空気に巻き込まれ、俺にへりくだるようになっていった。そんなこと求めていなかったし、ただ普通の生活を送りたかったただけなのに。

今考えれば、あの言葉を発したのはクラスのカースト上位にいた女子だったのだろう。だからみんな逆らえず、彼女の言いなりになってクラスの空気が形成されていき、俺は神のような扱いをされるようになった。

小4の夏休み、父親の転勤で遠くの町に引っ越しが決まった時は、正直ほっとした。

「引っ越しちゃうなんてさみしいな。ひろきくんのこと好きだったんだよ。こんなことになるなら、もっと勇気をもって話しかければよかった。」

そうやって言った彼女に「俺は嫌いだよ。」とだけ言って俺はあの町を去った。

転校先では俺の隣の席にいた原山海（はらやまうみ）が学校を案内しながらいろいろと教えてくれた。前の学校のときみたいに変な気を回されたりすることもなく、普通に接してくれることが嬉しかったし、仲良くなれるような気がした。

それ以降も、海がみんなに俺のことをうまく話してくれたのか、新しい学校では男子と仲良くすることができ、楽しく過ごすことができた。

女子に関しては関わることもなく小学生生活は平穩に過ごすことができた。海とは中学校が別の区域で、卒業と同時に分かれることになり少しずつ疎遠になった。

中学時代は海がいなくなり、小学校のときの海の周りにいた男子とつるむこともあったけど、基本的には音楽を聴いていることが多かった。女子から呼び出されることもあったが、俺は取り合わなかったし、思春期ということもあり周りの男子が呼び出した女子をちゃかして何度か男女を分けてのケンカになることもあった。しかし、回数を重ねるごとに呼び出されることもなくなり俺の生活を邪魔する者はいなくなった。

鉄仮面王子。俺は陰でいつの間にかそう呼ばれるようになっていた。

そんな俺がはまっていたのは『BLACK LIGHT(ブラックライト)』というバンドだ。ドラマーのジュンジロウを初めて見た時の衝撃は今でも忘れない。

今まで、何かにはまるということをしたことなかったはずなのに、俺はその日からひたすらBLACK LIGHT(ブラックライト)の曲を聞くようになった。ドラムを叩いてみたいと思わないこともなかったが、親に言うことができなくてドラムを買ってもらうようなこともなかった。

その代わりに親から与えられていたパソコンで曲を作るようになった。自分がかっこいいと思ったリズムに音を重ねていく作業が楽しくて仕方がなかった。

学校に行き、勉強はする。でも空いた時間はひたすらに音楽を作っていた。誰かに聞かせるためじゃなくて、自分がかっこいいと思った曲と作ることに満足していた。テストでいい成績さえ収めていれば親は何も文句言うことはなく、部屋に閉じこもる時間もどんどんと増えていった。

そんな俺の人生が変わったのは高校で海と再会したことがきっかけだった。

家からそんなに遠くない高校へと進学した。頭はそこそこいい高校であれば何も文句を言われなかったし、家から近ければ、学校が終わればまた家に帰ってきて作曲すればいい。そう思っていたはずなのに、入学して1週間たったある日、歯車はまた回り出した。

家に帰ろうと下駄箱に向かった俺の肩を誰かがつかんだ。特に友達という存在をまだ作れておらず、俺を呼び止める存在なんて思い当たらず、何かと思い振り返れば俺よりも少しだけ身長の高い男子が俺の顔を覗き込んでいた。

「浩樹だよな？ 僕、海！！原山海。覚えてる…よね？ さすがに。」

まじまじと見つめれば、その顔はあの頃の面影を残しながらも成長した海のものだと言われれば納得がいった。とてもうれしそうに俺の目を覗き込んできた。

久しぶりに会ったその姿に胸に熱いものがこみ上げた。俺のことなんて忘れて楽しく過ごしてるんだろうなと思ったこともあったし、あの頃とは変わったこともたくさんある。それでも俺に向けてくる目線から海は何も変わっていないことを感じた。

「ひさしぶり。」

俺の返事に海はニヘラと笑って、何も言わずに俺の腕を掴むと校舎の中に連れ戻した。どこに連れて行くつもりなのかは分からないけど、階段を上って渡り廊下を通して一番奥の第二音楽室と書かれた教室へと引きずりこまれた。誰もいない教室の真ん中で海は口を開いた。

「浩樹、一緒にバンドやろう。軽音部作りたいんだ。」

「えっと、状況があんまり飲み込めてないんだけど、俺楽器も弾けないし、歌もうまくないぞ。」

「浩樹に再会できたことがあまりにも嬉しくて説明忘れてた。今、軽音部を作ろうとしていて、浩樹とも一緒にできたら楽しそうだなと思ったら身体が先に動いちゃった。楽器は練習すればうまくなれるし、声もいい声なんだから歌も上手くなる可能性があると思う。だめかな？」

期待のまなざしでそう言われたら反論なんてできない。気が付けば俺はそのまま軽音部の一員になった。メンバーは俺を入れて5人。部活を作るには5人必要というルールにのっとって、正式な部活となった。

海はギター兼ボーカルをするらしく、メンバーは海の他に、ベースの浜田清太（はまだきよた）、キーボードの石山晴夏（いしやま）そしてドラムの中谷夢（なかにゆめ）。男子も女子もいたけど、予想以上に踏み込んでこないのは居心地がよかった。

軽音部ではドラムをやりたいなとうっすら思っていたけど、すでにドラムを担当する者がいるのであれば仕方がない。ジュンジロウさんに憧れているとはいえ、今までドラムスティックを握ったことない経験者がいるのならあきらめよう。俺は潔く諦めて、海にギターの弾き方を教えてもらった。

「ここはこう持って、こうやって弾くんだよ。」

一生懸命教えてくれるので、言われた通りにコードをなぞってみただけどうまく弾けることはなくて、才能がないんだなと実感する。シックハックしている横で、中谷がドラムをうまく弾いているのを聴くと、さらに自信をなくしていった。ジュンジロウさんの足元には及ばないけど、それでもうまく叩いているのが分かる。

俺は部室にあったギターを持って帰って家でも練習してみたけど、上達はなかなかしなかった。

そして、ギターの練習をすればするほど作曲の時間がなくなっていく。一生懸命教えてくれる海に対して申し訳なく思いながらもなんとなくストレスを感じるようになっていった。

「浩樹、これなに？」

海が俺の家に遊びに来た。部屋に通してトイレに行って戻ると、海が俺の作った楽譜を眺めていた。昨日作ったばかりの新しい曲を机の上に置いたまま忘れていたようだ。誰にも教えたことのない俺の趣味が見つかったことにうろたえる。

「曲だよ。」

「いや、何の曲だよ。練習してたのか？でも、こんな難しい曲初心者には早くないか？」

楽譜を見ながらメロディを口ずさみ始めた海の口をとっさに防ぐ。さすがに自分の作った曲を目の前で歌われるなんて思ってなくて、慌てていたのか力加減を間違え、海がバランスを崩したのか押し倒してしまった。

「やめろ、歌うな。さすがに作った曲をその場で歌われるのは恥ずかしい。」

海はおどろいたまま固まっており、口ずさむのもやめた。

一拍おいて俺の顔を見上げたまま顔を赤らめる。なんだよ、その反応。俺はその顔を見て今度は別の恥ずかしさを覚える。その表情にどきりと心臓が跳ねる音が聞こえたような気がした。

「ご、ごめん。」

そう言って海の上から退くと、海は身体を起こした。

「いや、えっと……。あ、そうだよ。作った曲って、これ浩樹が作ったのか？」

「ま、まあ。」

今更取り繕う方法が思いつかなくて、俺はしぶしぶ認める。そんなことよりも、俺ははやる心臓を止める方法を知りたかった。この感情を何と呼ぶのか分からない、いや、分かりたくないのかもしれない。でも、間違っていないのであればトキめきというやつなのだろうか？

ちらっと海の様子を見れば、真剣に楽譜を眺めていた。

「これさ、すごくない？浩樹が本当に作ったのなら、天才だぞ。」

いい加減恥ずかしくなって、ぼつりとそう言った海から楽譜を取り上げようとしたが返してくれないようだ。どうしていいのか分からず、俺は半分やけになってパソコンを立ち上げる。

「これ、聞くか？別に誰でも作れると思うけど、ソフトさえ入れれば、勝手に弾いてくれるし。」

海は「聞く。」とだけ言ってヘッドホンを装着した。そして、その楽譜の曲を流し始めると、すごくうれしそうにその曲を聴いていた。何度も繰り返し聞いて、満足したのかヘッドホンを外す。

「浩樹、この曲を僕は演奏したいし歌いたい。だめか？それに、これは今日聞こうかと思ってきたんだけど、浩樹は曲を演奏するのあんまり好きじゃないだろ？」

海はまっすぐ俺を見つめてそう言った。すべてを見透かされているようなそんな言葉に観念せざるを得なかった。

「まあ、正直…。ギターの練習するよりも曲作の方が性に合っている気がする。でも、せっかく軽音部入ったのに、演奏できないままだと存在価値ないし。」

「じゃあさ、ギターは俺が歌いながらやるから作曲するのはどう？恥ずかしいのは分かるけど、それでもせっかく作ったのに聞いてほしいってならないのか？」

「考えたこともなかったけど、でも、変じゃない？俺の曲。」

「どこが変なんだよ。特にこのドラムの刻み方とかBLACK LIGHT(ブラックライト)ってバンドの雰囲気を感じるし、それでいてパクリでもないし、才能あると思うけど。」

BLACK LIGHT(ブラックライト)の名前が出てきたことで嬉しくなり、俺はそれから作曲をするようになった。

軽音部での立ち位置ができた。最初は俺が作曲していることに対してみんな驚いていたけど、褒めて認めてくれた。

作詞はしたことがなかったけど、キーボードの石山が考えてくれることになった。同じクラスということもあり、作ったものを見せてくれて相談に乗りながら俺の曲に歌詞が載っていく。石山はセンスがいいと素直に思った。

夏休みに入る前には自分たちの曲は何曲か用意できるようになっていった。

そんな俺には悩みが一つあった。海への気持ちだ。あのことをきっかけに海への気持ちが変わってしまったというか、元々あったものに気が付いたというのか……。

海がちょっかいをかけてくるたびにかわいいと思ってしまい、誰かと話しているとその内容が気になって仕方がない。

一生懸命にその気持ちを隠そうとすればするほど変な態度をとってしまう。ちょっかいをかけられれば、わざと無視してみたり、意地悪な態度をとってしまったり、誰かと話しているときは話を無理やり振ってその場から連れ去りたくなる。

そんな俺の奇行に気が付いていないのか、海は俺とは仲良くしてくれていた。

最近をよくベースの浜田と2人で一緒に話しているところを見かける。仲良さそうに部室に入ってくる姿を見かけては、その場から連れ去って何を話していたのか聞きたくなる。

俺が同じクラスの石山と作詞作曲を考えている間もずっと2人で何かしてると考えると気が狂いそうになる。

こんなのおかしいと思いながらも気持ちは抑えられない。

そんな夏休みのある日、俺は部室で一冊の本を拾った。誰もいない部室に落ちていたその本を開いて興味本位で覗いてみる。すると、そこには海と浜田の漫画が描かれている。明らかに顔を赤らめた浜田に対して海が迫っているシーンだった……おそらく。

俺は気がついたらその本をびりびりに破いて、その場に投げ捨てて部室を出ていた。

なんだあれは？意味が分からない。それ以上に嫉妬でどうにかなってしまいそうな自分の気持ちを治めるために屋上へと向かう。風にあたれば少しはましになるかと思った。

でも、屋上についても生ぬるい風しか流れない。

いったい誰があんな本を書いたのだろうか？海は浜田とできているのだろうか？頭の中に詰め込まれた疑問は解消することはなく、ぐるぐると回り始める。

少し落ち着いて部室に戻ると、海と中谷が部室内で騒いでいる声が聞こえてきた。

他キャラクターのイメージ

【原山海】

小学生の時から友達。なんだか二人でいるときは胸がドキドキするし、ほかの人と一緒にいるのを見ると、胸がざわつく。俺のものにしたいという気持ちと、傷つけたくないという気持ちが入り混じる。

【浜田清太】

海と同じクラスで、2人でいるところは度々見かけるので気に食わない。悪い奴ではなさそうだけど、大切なのはそれだけじゃない。今回、海の相手役として描かれていたが、実際のところどう思っているのかは確かめないとイケないし、最悪排除の必要もある。

【中谷夢】

ドラムがすごくうまい。それは認める。ジュンジロウさんのイメージでいろんな曲のを作っても、難易度を上げててもいつの間にか完璧に叩けるようになっている。最初はドラムをやってみたいと思っていたので、邪魔だと思っていた部分もあるけど、今は認めている。

【石山晴夏】

同じクラスで、作詞と作曲をやっているのだから話すことはある。歌詞は書けないのでいてくれて助かるし、言葉選びのセンスもいい。特段悪いところは見当たらないので、女子の中では好感度はマシな方。

以前、ボトルシップに流した内容

【海と原山が仲良さそうにしているのを見たときに書いた投稿の内容】

自分のものにしたい。どうしてもなく嫉妬心に蝕まれてしまう。2人だけの世界になればいいのに。

【海のことを考えているときに書いた投稿の内容】

平常心を保てない。顔を見るたび、近くに来るたび、頭の中がおかしくなってしまうようになる。

【中谷のドラムを聞いて書いた投稿の内容】

あの才能にだけはもう嫉妬すらなくなった。どんな曲にでも対応できるのはすごいと素直に思う。

目標

- ・BL本を書いた人を探す。(とりあえず書いた奴は許せない。)
- ・BL本を破いたことは隠す。(世の中にはみんなが知らなくてもいいことがある。)
- ・海と浜田の関係性を探る。(本当に二人が思いあっているのかどうか知りたい。)

※後半議論中に必ずやること

原山海が前半議論で自分のことをどう思っているのか教えてくれない場合は後半議論中に密談に誘って、「海はどう思っているの?」と気持ちを聞き出す。

ボトルシップのID
p-opvly

ひいてはいけないボトルシップの番号
6・19・23